いしゃ先生 ▶29

町おこし映画顛末記

あべ 美佳

お医者さまも人間だ

ついに、ついに、この日が来た！　今月25日、西川町で「いしゃ先生」関係者試写会が催され、われらが山形県民の宝・志田周子の人生が銀幕によみがえるのだ！　このプロジェクトに参加して4年半、長かった。県民の皆さま、日本中の応援団の皆さま、ほんてん、ありがとさまです。

できあがった作品を皆さんに見てもらう前はいつも、うれしさと同じぐらい、恐怖がある。特に今回は、それこそ山形中の期待をひしひしと感じているので、3日前から眠れないだろう。監督もプロデューサーも「もし地元の人が喜んでくれなかったら、僕ら山形には二度と足を運べないですよ～」と冗談半分、覚悟を決めているようだ。

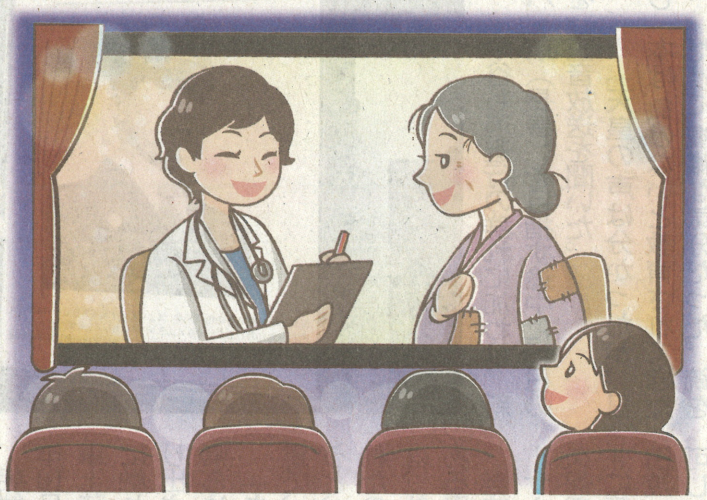
そんなドッキドキの状況下で、西川町からこんな電話がきた。「あべさん、もし舞台である大井沢地区の人から苦情がきたらどうしましょう？」「苦情？　それはどんな？」「大井沢であだなボロ服着ている人はいねぇっけとか、周子先生に意地悪くする村人を描かれたんじゃ、地域のイメージが悪くなるとか」…不安なのは分かるが、それはあんまりだべずぅ。

何度も申し上げるが、この映画はドキュメンタリーではない。モデルは志田周子だけど、同じ時代を生きたたくさんの方々の人生が一緒に詰まっているエンターテインメント作品なのだ。大きな感動を得たければ、それと同じぐらいマイナスなことも描く。それは創作のセオリー。振り幅、という言葉でも表現される。だから取材をいっぱいするし、ときには演出上のうそもつく。当時、あんな風に顔を汚している村人はいなかったと言われれば、そうですよねぇ、とうなずくしかないのだ。―なぁんて言っても、私は、どだな批判もぜーんぶ受け付けます。そういう仕事をしているのだから。んだがら、西川町の方、心配しねでけろ。自分たちが何を伝えたかったのか…最後まで見ていただければ、ちゃんと伝わると信じましょう。

「あべさんは、いしゃ先生を通じて何を伝えたかったんですか？」。先日、とあるインタビューで受けた質問だ。「うーん、ひとつは、お医者さまだって人間だ、ということかもしれません」。私はそう答えた。前回ここで「お医者さまは神様です」と言っておいて、スミマセン。んでもよ、この作品に携わって、たっくさんの「医者先生」たちに話を伺って、初めて気付いた正直な気持ちなのだ。お医者さまだって、鼻水が垂れることもあるし、腹いっぱいだぐなることもある。そんなのあだりまえだべ、と言った、そごのアナタ。けっこう私たちは、そのことを忘れてしまっていると思うのだ。「医者＝神様＝聖人」。そんな風にわれわれ患者側が都合よく「医者は神様」と決めつけてしまうと、先生方は必要以上に頑張らなくてはならなくなる。私はそれが、おっかないのよっす。

生涯たった一人で村人の命を守り続けた周子先生もそうだった。当時のある雑誌に「恋を捨て、夢を捨て、生涯を故郷の村にささげた仙境のナイチンゲール」と書いてある。自己犠牲の精神、その美しさ…あぁ、やんだごど！　私はそんなの、好きじゃない。第一、周子先生に失礼だ。周子先生はきっと、自分の人生を犠牲にしたとは思っていない。そりゃあね、最初は「あーあ、東京に戻りたいなぁ。私はこんなにがんばってるのに、なして誰も認めてくれないのよー」って、やんだぐなったかもしれない。けれど、絶対に、どこかで変わったはずなのだ。「これが私の天職」と自分で自分の役目を受け入れた瞬間が、きっとあったはず。映画の中でその瞬間を描きたくて、私たちは「いしゃ先生」を作ったのかもしれない。

ところで、天職を英語にしたらCallingっていうの知ってます？　周子先生は、村の人たちに「いしゃ先生」とたくさん「呼ばれて」自分の使命を悟ったのかも。―さて。映画の上映が終わった時、私たちは果たして何と呼ばれるのか…あぁ、おっかねぇ。



（脚本家・作家、尾花沢市出身）

＝月1回掲載します